



褥瘡（じよくそう）になつて

ご家族が骨折入院されたAさんから、お話を伺いました。

「〇〇病院が受け入れてくれますが」

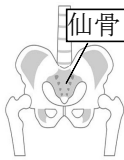
Aさんのお義母さん（大正十五年生まれ）が自宅で転倒し、右ひじや恥骨、仙骨を骨折しました。救急隊員に言われ、そのまま受入れ病院に十日間、入院しました。高齢の為、骨折箇所の手術は行わず、自然治癒を家族は選択しました。

「退院後、オムツ交換で見たら仙骨の辺りが紫斑になっていました。」

訪問医に診察してもらおう

と褥瘡（じよくそう）と診断されました。

褥瘡（じよくそう）とは、



一般的には床ずれと呼ばれています。

褥瘡は一日でできません。寝たきりの方

や手術後で体位変換がうまくできない

方は体重で圧迫されている場所の皮膚

に対して持続して圧力がかかり続ける

ことになり、血行不良をきたすように

なります。それにより皮膚の一部が赤

い色味をおびたり、ただれたり、傷が

できてしまいます。仙骨、尾骨、かか

となど骨のある皮膚の部分に褥瘡ができやすくなります。仰臥位（仰向けになつて寝ている姿勢）では仙骨部、踵骨部、

座位（座った姿勢）では尾骨部、側臥位

（横向き）では大転子部に発生しやすい

と言われています。その深さにより重症

度が分類されます。お義母さんは深度が

あり、壊死部分もあつたため、患部を洗つ

て清潔にし薬を塗って保護し、皮膚の回

復をはかりました。壊死した部分は痛み

を感じません。

「その状況にに応じて」

退院直後は、車イス移動の為、段差の

ある玄関にスロープをつけることも考え

ました。しかしスロープでの車イス移動

は、介助者の負担も多く、安全を考え昇降機を一時的に借りました。また、ケアマネージャーと相談して自動の体圧分散のマットレスを九百円／月（介護保険適用）を借りることにしました。

そしてデイサービスも規模や職員の対応が、お義母さんに合っているかを考えて決めました。

Aさんのお話。

『今回の事で一番びつくりしたのは、こんなにも短期間に簡単に褥瘡になつてしまうことでした。誰にでも可能性があることなので、褥瘡についての知識を知ることがあれば良かったと思いました。』

一番嬉しかったことは、全てが手探りで先が見えない時に、デイの施設長さんが「ハガちゃん（お義母さん）大丈夫だよ。うちに連れてきな」と言つて、退院して四日目から受け入れてくれたことです。また、高齢者になると坂を下るような機能等が落ちて行くことが多い中、こんなにも復活することもあると言うことが驚きでした。』

「相談して助けられて」

Aさんは突然の入院とその後の状況の変化にとまどうことの連続だったそうです。知らない、判らないことに直面し、

多くの方の助言を受けて前に進めました。

褥瘡を治すことは根気があることです。が、丁寧に対応して行けば結果がでます。

通所しているデイサービスで入浴し、訪問医、訪問看護師、Aさんたち家族の手厚い手当により半年かけて、お義母さんの褥瘡部分は完治に向かっています。